4節　伝統的工業と地場産業

1　伝統的工業

飯水の伝統的工芸品

1974年（昭和49）に「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」（伝産法）が制定され、これに基づいて通商産業大臣が指定するものが「伝統的工芸品」である。この対象となる伝統的工芸品には五つの要件が必要である。

この五つの要件をすべて備えていて、伝統的工芸品産業審議会が認めたとき、通産大臣から「伝統的工芸品」に指定されることになる。ここで使われている「伝統的」というのは、“100年”以上前から続いているということが基準となっている。

伝統的工芸品の要件
☆主として日常生活に使われるもの
☆殆ど手作業で製造されたもの
☆伝統的な技術や技法によって製造されたもの
☆伝統的に使用されてきた原材料を使っているもの
☆一定の地域の生産者が集っていること

しかし、完全に“100年”以上前と変わらないというものではなく、その時代時代においての技術の改善発展などや原材料の入手についても“製品の特質を変えない”“もち味を変えない”範囲でくくり、その時代の人々が工夫してきた部分も含んでいるのが「伝統的工芸品」である。

飯水地方では、「飯山仏壇」と「内山紙」が国の指定を受けている。「飯山仏壇」は愛宕町に、「内山紙」は瑞穂を中心として現在製造が続けられている。

2　飯山仏壇と内山紙

寺と仏壇の町

愛宕町から神明町にかけては20をこえる寺社が立ち並び、「寺の町いいやま」とも呼ばれる由縁となっている。この地区を中心に仏壇製造業者が集中して軒を並べ、24の事業所・133人の従業員が仏壇の製造に携わっている。飯山に仏壇作りが今日まで発達してきた要因として、下に示すことがらがあげられるが、いずれにしても雪深い奥信濃の暮らしの中で先人たちが、新しい時代の波及を受けとめながら長い年月の間に徐々に築きあげてきたものである。

かって、禅宗、浄土宗、浄土真宗および日蓮宗など八宗向けの製品であった仏壇は、地場消費に頼りながら、販路を拡大してきた。仏壇店のもと、各工程の職人さんが分業機構を通じて密接な関係を築いて産地を構成してきたのである。

仏壇作り発祥の要因

☆仏教信仰の厚い土地柄であること

☆飯山藩の城下の防衛も考えた城下町政策と寺社政策

☆原材料となる木材などが地元にあったこと

☆すんだ空気と適度な湿度が漆塗りに適した気象条件であったこと

☆冬期間の副業にもなったこと

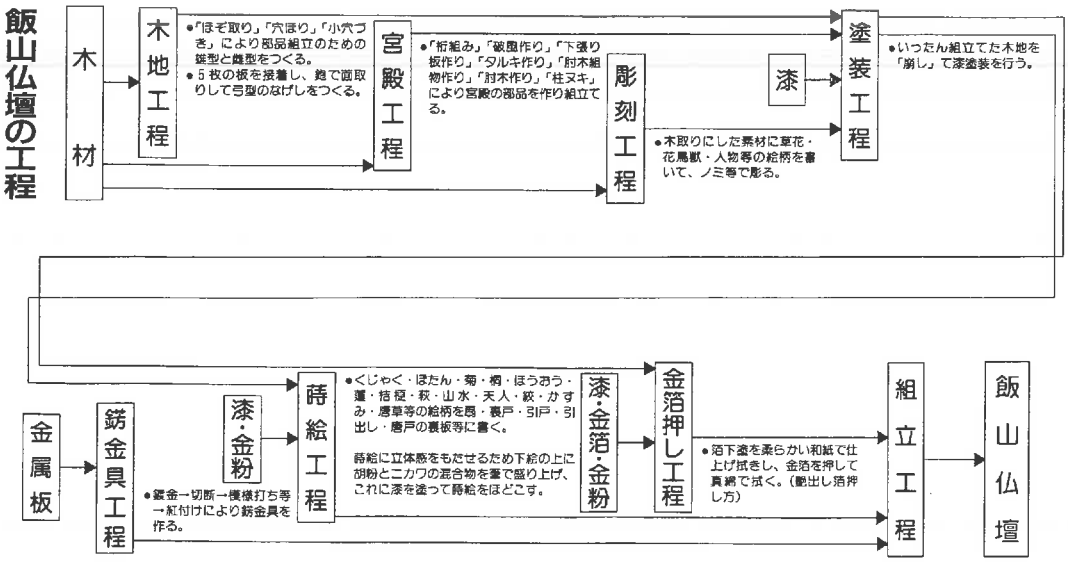


図3-4-1　飯山仏壇の工程（伝統産業会館パンフレットより）

「紙は気をすく」
内山紙

原料にはすべて楮を用い、強靭で通気性、通光性に優れた特色を持つ内山紙はまた、「雪ざらし」のため薬品を用いなくても自然な白さが得られ丈夫で風雪に耐える特色を持っている。

手すき紙の工程は典型的な冬季作業である。時代の移り変わりとともに部分的には人力から動力へといろいろな改良工夫が加えられたが、先に述べたとおり、基本は今日でも受け継がれている。

流し漉き　（商工観光課より）

雪ざらし　（商工観光課より）

楮を雪の上にさらす。上にかけた雪がとければまたまた雪をかけ、晒す。この作業が内山紙の特色である“自然な白さが得られ丈夫で風雪に耐える”を作り上げている中心であり、また、漉き手の微妙な感覚を必要とする工程でもある。「紙は気をすく」といわれる所以である。

飯水にこの内山紙づくりが現在まで続いてきた背景は、やはり、多量の雪で楮を白く晒す

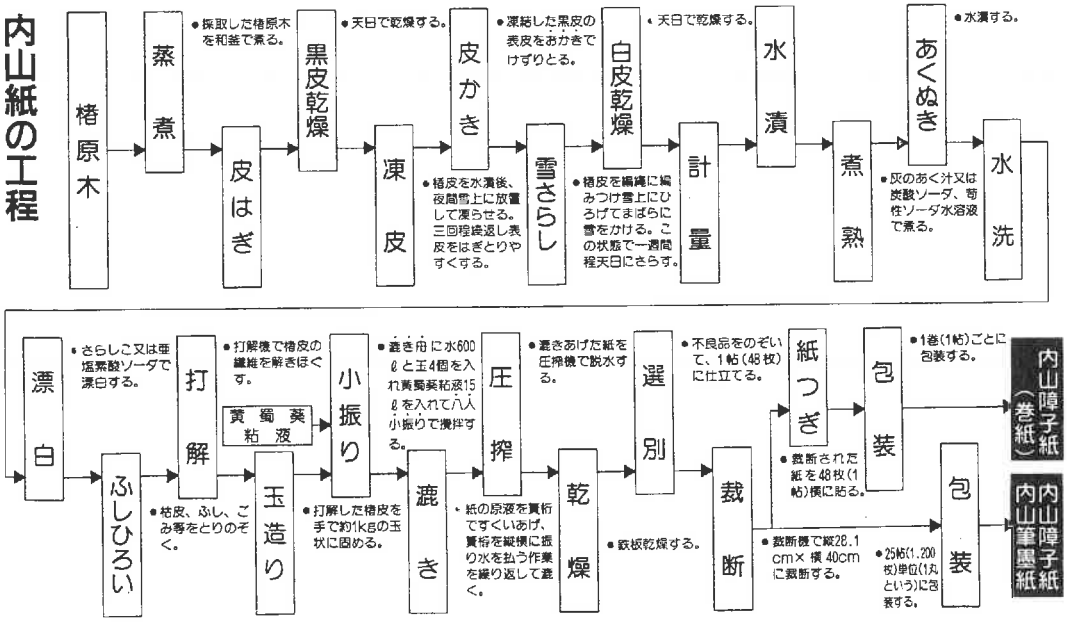


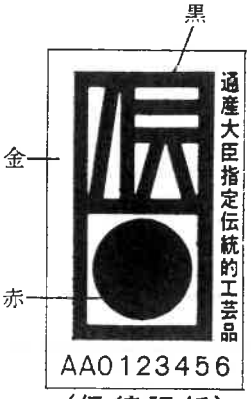
図3-4-2　内山紙の工程（伝統産業会館パンフレットより）

のに有利であったこと、隣接地新潟を含めて強い障子紙の需要が高かったこと、冬季の副業として手ごろなものであったことなどの条件が揃っていたことが考えられる。

伝統を守り伝えるということ

指定された伝統的工芸品には「伝統証紙」が貼られる。これはいわば「伝統を誇る手作りの証」になっている。

私たちは普段、仏壇なら仏壇をひとまとめにして「伝統的工芸品」としてしまいがちであるが、そうではなくて、上記の証紙を貼ったものが（つまり、伝産法の内容にあっているものだけが）「通産大臣指定伝統工芸品」なのである。



（伝統証紙）

したがって、「飯山仏壇」にしても「内山紙」にしても、それとは別の製造過程を経るものも製造されている。「飯山仏壇」にしても「内山紙」にしても、ビジネスとして経済性を考えた場合、単純に「伝統的工芸品」のみを製造するというわけにはいかない。社会経済の変化は、これら製造者にも当然これからのあり方を求めてきている。後継者の問題とも絡むものでもある。直接的にいえば「伝統的工芸品」の製造だけでは、食ってはいけないのである。これらは当然、購入者側の意識の変化も影響している。販売を中心とする量販店の進出、安価な商品を求める傾向、そういうものに対応する“商品”の製造販売もあわせて行っていかなくてはなら

表3-4-1　和紙の状況

年次	生産戸数	従業者数	生産高	生産額
	戸	人	t	万円
1984	43	98	28.9	9,827
1985	43	98	30.0	9,414
1986	43	98	31.0	8,104
1987	30	91	15.6	9,388
1988	27	60	16.0	9,974
1989	23	60	15.2	9,287
1990	23	60	15.9	9,452
1991	23	60	15.1	9,777
1992	23	60	18.1	9,584
1993	23	60	17.5	9,054
1994	19	50	18.0	8,890
1995	19	48	18.0	8,149
1996	18	48	15.0	8,000

（北信内山紙工業協同組合より）

表3-4-2　仏壇の状況

年次	事業所数	従業者数	製造品出荷額等(万円)	商店数	従業者数	年間商品販売額等(万円)
1984	24	139	116,546			
1985	23	136	106,842			
1986	23	131	94,236			
1987	21	144	103,135			
1988	22	140	109,612	17	67	123,542
1989	21	151	126,057			
1990	23	151	118,076			
1991	22	139	119,496	19	101	125,114
1992	21	138	122,428			
1993	22	133	124,719			
1994	17	133	125,092	18	70	133,613
1995	22	147	113,746			
1996	24	133	102,513			

（1998年度 飯山市の統計より）

ない。しかし、コストを下げていくことは当然工程の中では、下手をすると職人の腕をなまらせることにもつながりかねないことで、この兼ね合いも難しいところである。今後、将来的に考えた場合、両者とも（両者に限らず）この問題は避けては通れないのである。

《地域点描》 伝統と生業の間で

「いままでと同じことをしていたのでは残らない」

「新しいものを取り入れたり、やめたりしながらの繰り返しで今までやってきた」

「今は正直、先が見えない」

「観光産業としていくのか」

「美術品的になってもいけない」…

いずれも仏壇、内山紙製造に携わる方からお聞きした言葉である。伝統的工芸品としてありながら、かつ生業としての製造の間でこれからのことをお聞きしたときであった。

内山紙を製造しているＡさんは現在、伝統証紙をつける製品は全体の３割のペースで製造している。仏壇製造業も外国生産、工程の省略化などでいわゆる“売れ筋”商品の製造も並行して進められている。

内山紙にかかわる方からお聞きした

「伝統品というけれど、たとえばこの地域でだれが買ってくれているかということも考えるとね」

という言葉が印象的であった。

3　地場産業

発祥地の中のスキー産業

1953年ごろ、飯山市にはスキー製造の事業所が10数社設立されていた。輸出の景気もよく順調に伸びてきていた。

大きな変化がやってきたのは、1965年、変動為替相場へと変化するときであった。以前に比べて円高に変化していく中で、輸出が次第に減少していくようになる。当時200万台あった輸出量が1998年では３万台となっている。しかし、逆に輸入が200万台へと伸びてきている。つまり、日本のスキー産業は日本国内の市場で競争力をつけていかなければ経営が成り立たない状況へと変化してきているのである。加えて、スキー人口の構成変化といった需要面での変化も現れてくる。

このような状況の中で、いくつかの経営変革がスキー産業でもなされていく。全国的にみて、かつて70数社あった企業もいまは一桁に落ち込み、飯山市でも1998年現在３社となっている。とくに1998年には、生産を中止する企業、ブランド名を残してOEM（original equipment manufacturing　相手先商標製品製造）生産へ移行する企業など淘汰も進んでいる。

このような状況の下で飯山市のある会社ではこの現状に対して次のような対応をとっている。

【生産面】

○海外生産　欧州、中国を拠点として現地生産を行う。

○技術開発　1973年、世界初のポリウレタン注入方式による製造技術を開発（インジェクションスキー）

○ニーズ　スキーブームの波が1991年を境に減少し、つづくボートのブームに対応しボード生産の開発、製造ラインの確立。

○OEM　自社の技術をいかした、他社ブランドの受注生産

【経営】

○レンタル　冬場の業務は主に次年度向けのスキーの開発と輸出向けのスキー生産にかかっていたが、社会環境の変化で冬場の仕事量が減少。それを補い、また将来的な需要の開拓を含めて、特に修学旅行向けのレンタルの開始。夏場から個人個人のサイズを合わせセットする。そしてなお、当日はサービスマンが貼りつき、調整する。レンタル後は回収し、工場でメンテナンスをする。

○底辺拡大　トップ競技者向けのスキー開発から、一般向けのスキー開発生産へ。そのため、ブームの変化などへの対応も早い。

○情報と対応　上で述べたことに関連して、情報の収集と製造へのリンク。先をみて対応する。

【今後】

日本も含めた世界のスキー産業の中で、産業界の整理がされてきた。残った企業が需要に対して供給していくことになろうかと思うが、この景気が（いつかわからないが）回復するころスキーの需要については現状は維持できるのではないか。

スノーボードの製作過程

表3-4-3　スキー産業の状況

年次	事業所数	従業者数	製造品出荷額等
	戸	人	万円
1984	5	172	137,920
1985	4	166	161,734
1986	4	166	145,983
1987	4	148	122,587
1988	4	120	112,060
1989	4	117	127,324
1990	4	120	150,862
1991	4	119	133,538
1992	4	124	133,603
1993	4	129	125,228
1994	3	113	123,641
1995	3	106	114,683
1996	3	97	164,430

（1998年度　飯山市の統計より）

4　伝統産業会館

伝統を守り伝える拠点として

1982年（昭和57）、国や県の補助を受けて「飯山市伝統産業会館」が作られた。「大量生産、大量消費の風潮の中で、いま、伝統工芸品の良さが認識されています」「伝統産業の一層の振興を期待します」という市長から寄せられた言葉の通り、県内の「伝統的工芸品」の展示と体験コーナーなどが設置され、観光の発展とあわせて伝統を守り伝える活動の拠点となっている。

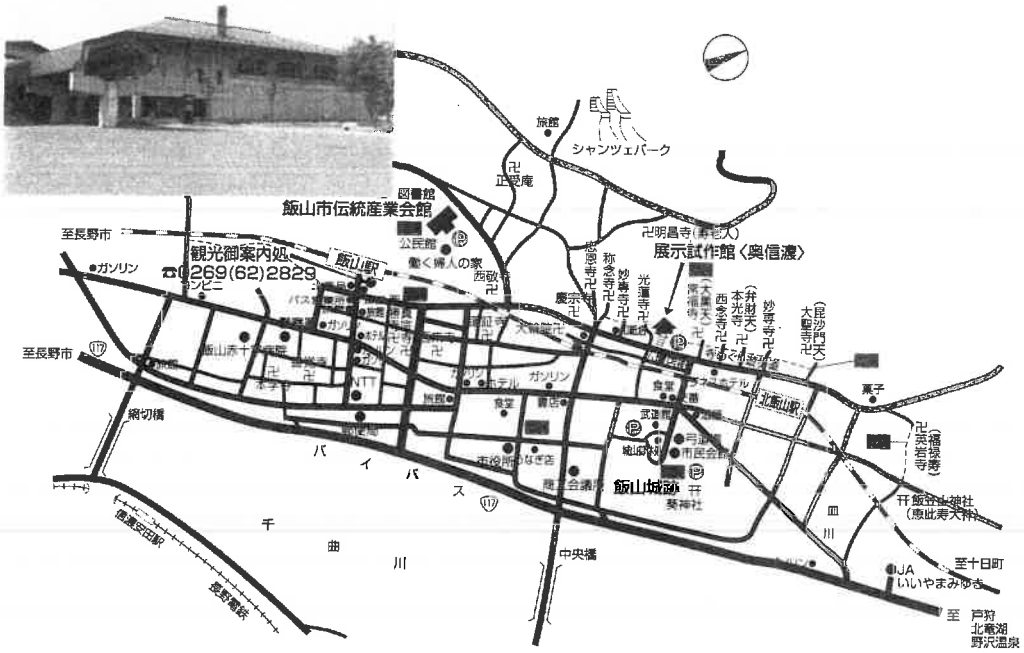


図 3-4-3　寺の町いいやま案内図（写真は伝統産業会館）